

日本建築学会大会関連行事

学生による語り合いのシンポジオン 2009 報告

「地域の諸問題を対象とした設計・制作活動」

主催：東北支部

1. はじめに

今回は、地域における生活環境としての住まいづくりと街づくりをテーマに、この問題に取り組む学生諸君の交流の場とした。現在の学生諸君にとって大事なものは、自分たちの活動発表ではなく、他のグループや職業人(建築人)との間で語り合いにより、各自の取り組み、問題設定や問題解決について奥深く展開することである。ここに、様々な活動をする学生諸君が一堂に会し、お互いに主張し、大いに語り合い、探究心を研ぎ澄ます場というシンポジオンを企画して、東北地域の大学を中心に参加を呼びかけたところ、5チームの参加があり、来場者とともに熱く語り合うことができた。以下に報告する。

2. 開催概要

日時：8月27日(木) 15:00-17:20

会場：東北学院大学泉キャンパス 2号館4階 247室

話題提供学生:5チーム 参加者35人(学生24人、建築人11人)

実施タイムテーブル 15:00-15:05 主旨説明

15:05-16:00 各チームの発表 10分/チーム、計5チーム

16:00-17:00 語りあい(自由討議)

17:00-17:20 各チームまとめ、全体のまとめ



発表風景、複数の学生が分担発表 語り合いの風景

3. 各グループの発表と語り合い

3.1 福島県桑折町でのまちづくり活動

「都市・まちづくり研究会」東北大学チーム；

荻谷智大 M1 勝野悠作 M1 掛本啓太 B3

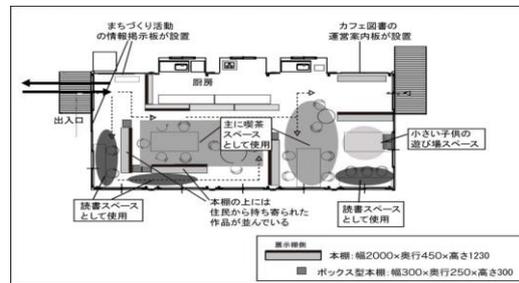
(1) 概要 近年、住民のまちづくり活動への参加は、制度、技術、組織の面で大いに進んでいるが、一方で、住民の無関心は依然として大きな問題である。こうした地域活動と関係の薄い住民の参加を支援・促進するものとして近年「まちづくりカフェ」が各地で始められている。私たちは、福島県桑折町において、まちづくりカフェ「カフェ図書」を開設・運営することでより多くの住民がまちづくりに参加できるのではないかと期待して活動している。

カフェ図書は、①まちなかに若者が集まり町について語らう新たなコミュニティスペースの開設、②まちづくり活動への参加の敷居を下げることを目的として活動した。

昨年度の活動を通して、以下の2点の成果を得た。

(1) カフェ図書開設運営のプロセスにおいて、運営スタッフと住民とのあいだに相互に支援・協力する関係が生じた。

(2) 「本の収集」「協働製作作業」といった開設プログラムはカフェ図書という場所に対する愛着を生んだ。



カフェ図書平面

(2) 語り合い ・カフェと図書、どっちの比重が大きいのか。／図書館というわけではなく、コミュニケーションの場に図書があるといった感覚である。図書のほかに作品も置いている。 ・当該施設に、街づくりの歴史がわかるような展示もあるのはいいですね。／運営面において、住民とまちづくり活動への接点を生むために、カフェ図書では店の売上金の一部を町内まちづくり活動へ寄付する仕組みを取り入れた。店内には町内まちづくり活動の情報誌やイベントのチラシを設置し、カフェを利用しながらまちについての情報を得られるよう設計した。 ・学生と教員が地域に入る。それが協同というもの、やりたいことをやりましょう。・今後は、／若年層に対して活動の紹介とまちづくりへの参加を促したい。

3.2 都市の中のコミュニティを育む畑「まちなか農園」 宮城高専OBと現役チーム；柳谷理紗(OB)、

原冬樹(専攻科1年)、山口真季(5年)

(1) 概要 仙台都市総合研究機構の平成17年度研究事業の取り組みの一環で「まちなか農園」と称される都市の中の畑が構想され、平成18年に仙台駅から徒歩5分の土地区画整理事業地内に実験的な畑「アーバンスコップ」が作られた。その後、研究機構は廃止になり、まちなか農園をサポートする「アーバンスコップ倶楽部」が設立され、活動が引き継がれた。アーバンスコップ倶楽部そのものは、平成19年に当該地付近に新たに「まちなか農園藤坂」を開設し平成20年に解散となった。

まちなか農園の目的は、産業としての農業の再生ではなく「農」の心呼び戻すこと、壊れてかけている文化・ライフスタイルを再考・再生することにある。ここでは生きることの大切さ、育てることの大変さ、自分の手をかけることの豊かさ、自然との繋がり、そして人の繋がりを学ぶことができる。地に足の着いた場所で、立場を超えたもの同士が共に汗をかき、新しい社会の形を創造していく。それらがこれから必要ことではなだろうか。

現在まちなか農園藤坂は町内会を主体に運営されている。そこにさまざまな形のサポーターが関わっている。最近では近郊農家による直売市・植え付けの指導や、山形県朝日町との交流が行われ、地域間の交流も広がりを見せている。

(2) 語り合い ・「農」について、住民はどのように携わるのか?／様々な人が関われる場、様々な能力が発揮できる場であることが大事であり、たとえば、ハンディのある人も関われる。料理上手な人、木工の得意な人、そんな能力が発揮できる。作らなくても通りすがりに成長を感じることができる。 ・学生はどのようにかかわるのか。／多分野の学生が、学校で学んだそれぞれの力を発揮するようかかわる。 ・どのようなコミ

ユニケーションが図られるのか？／「農」をツールに、現代社会の抱える問題を解決することができるのではないかと思う。お年寄りたちはそこで若者のパワーや子どもたちの笑顔に触れ、元気を取り戻しておられた。またその場所がなければ言葉を交わすことのなかったであろう人たちが、畑を媒介にして会話を楽しんでおられた。・自然を愛好する方々の輪が広がるといいですね。・みなさん、農園に来てください。



「まちなか農園藤坂」

3.3 地域で創出！

子供達の自然触合い環境「栗生小学校ビオトープ」

東北文化学園大学チーム；杉山広晃 D4、紺野まりえ D4、千葉元 D4、白座壮浩 D4、横尾俊輔 D4

(1) 概要 子供の健全な成長のために、建築が如何にかかわるべきか、この視点で栗生小学校(04年に仙台市西部に開校)に、自然との触れ合い空間として「教育ビオトープ」を提案・設計し、5年間にわたり管理運営を支援した。プロジェクトの骨子は、「教育施設の屋外空間の自然化」、「子供達の自然観を育てる豊かな教育環境を学校に」、「環境問題は人づくりから」である。

区画整理事業によって田園が宅地に変わった同校の中心部に里山と小川を再生したビオトープを配し、子供たちが自然の生き物を身近に感じることができるようにした。蛇行する人口川の中心に設けた一直線の観察デッキでは、腹ばいになった子供たちが目の前に開けた自然に目を見張る光景が見られる。

プロジェクトの継続に重要なのは、完成後も支援を続けることで、研究室が中心となり、地域の団体や老人会・同校のPTAを巻き込み、草むしりや細かな管理・修繕を支援し、またビオトープを活用した土曜環境スクールを開いて、小学校の教員らとともに生き物の採取や調査を通じた環境教育支援を行っている。

文科省は「自然体験が豊富な子供ほど『道徳観・正義感』が身についている」という見解を示しており、今後はこの検証と発展に力を入れたいと思っている。



ビオトープを活用した土曜環境スクール(生物調査)

(2) 語り合い ・自然がそこいらに沢山ある地方の片田舎でもビオトープを設置しているが、／自然のあるところでもっと自然と付き合って欲しい。教育ビオトープは単に自然に触れるということだけではない。・管理を支援するという考え

は大変気に入りました。／自然は生きている。伸び放題の状態が自然でも、教育ビオトープは子供たちが触れられる自然を提供することが重要と考えているので、積極的に自然を管理・制御している。・ビオトープのメンテと地域の人との関係についてはどうか。／若い父親と地域のお年寄りが一緒に活動する姿が増えてきた。他人に対する思いやりもつまりは「命の尊厳」。花や鳥、虫や魚や蛙やへびなどの生き物の命を身近に感じて、そこから「命のすばらしさ」を学んでほしい。

3.4 仙台市国見ヶ丘・ニューライフ国見マンション

「地域交流によるコミュニティの再構築」

東北文化学園専門学校チーム；

吉田幸司 B2、千葉慶介 B2、佐藤智美 B2、佐々木里菜 B2

(1) 概要 建設後35年が経過し、高齢化などによる住民相互の交流の希薄化や地域社会からの孤立といった現代のマンション問題を現実抱える地元マンションを舞台に、専門学校生と住民との交流やワークショップの開催をきっかけに、マンションのコミュニティの再構築を図り、そこにある魅力的な施設の利用・活用を軸とした地域全体のコミュニティのリノベーションを目指している。

初年度の今年度は、荒地になっていた敷地内のコミュニティスペースの手入れから始め、芋煮会や収穫祭の開催、まちなか農園の展開、花火見物の屋上開放など、まずはマンション住民による「隣人祭り」の継続的展開を提案した。このマンションコミュニティ再構築をきっかけに、地域全体の独居老人のサポート、子育て支援、小中学校の総合的学習の支援など、発展的な地域再構築に繋がっていくことを目指している。



敷地内のコミュニティスペースの手入れ

(2) 語り合い ・地域コミュニティの再構築として古いマンションを核にしているのは面白い。／魅力的な空間を持っているマンションです。・古いものの再利用で地域のたむろする場所とは粹ですね。・たくさんのアイデアスケッチは夢があっていいですね。

3.5 新潟県長岡市栃尾表町における

「雁木づくりを通したまちづくりの取り組み」

新潟大学チーム；後藤洋平 M2、高坂直人 M1

(1) 概要 昔ながらの街並みを残す栃尾表町では、各住居が設けた「雁木」が冬期の歩行空間であり、地域住民のコミュニティの場として親しまれてきた。しかし近年、住宅の建て替えや駐車場確保などに伴い雁木通りは歯抜け状態になっている。そこで、「手づくりによる持続的なまちづくり」をキーワードに、地域住民・新潟大学工学部・栃尾市(現長岡市)が協働し、平成9年より減少しつつあった雁木の建設に取り組んでいる。その後も毎年一棟ずつ雁木の建設を継続し、雁木づくりをきっかけに地域と大学との交流が深まっている。

(2) 語り合い ・特に苦労したことは、／資金と土地の確保に苦労した。活動に対して理解を得るのは容易でない。 ・雁木まちづくりの特徴は、／無理をしない。金をかけない。手業を活かす。楽しんでやる。ということを一貫してしている。一気にやるのではなく、時間をかけて毎年一棟ずつ建設し、雁木づくりで地域コミュニティを育てている。また雁木のデザインから施工まで、地域の方と学生との協働によって行っていることが特徴である。 ・活動を続ける上で重要なことは、／活動に携わる人それぞれが「協働」という概念を共有し、各々の立場で出来ることをしていくことが重要だと考えている。 ・欄間のある雁木について、／栃尾の古い雁木にある雪見の欄間の分割を活かして、曇りガラスを入れた欄間が古い雁木通りの記憶を受け継いでいる。 ・最新の雁木デザインについて、／大学と地域との協働を(二つの柱を並べた)双柱という形にして、広い間口に対して安心感を与えるようにした。他多数有り。

(3) ひとこと 私が受けた質問のほとんどが「土地」と「資金」についてでした。しかし、建築を造る以上、土地と資金が必要であり、それらを誰が担保するのか。やはり、どの活動でもこの2つがネックになっているのかと感じました。その上で、雁木活動が13年間続いているということは、他の活動もそれができるという可能性を示しているのではないかと思います。手前味噌のようですが、私たちは雁木活動に誇りを持っています。西村先生や栃尾の方々、先輩方が残してきた活動を今後も継続させていけるよう、私たちは尽力していきます。



みんなまで新しく制作した雁木

4. 学生のコメント

●発表を通して農を通じてコミュニティ再生をしたいと考えていた大人にも会えたり、建築やまちづくりのあり方は？これからの社会に必要なことは？と考えている同世代のみんなに出会って自分にとってとても刺激となりました。(by 柳谷理紗)

●「日頃の活動、その成果をみなさんと自慢し合ってください」と、司会のご挨拶は、学会という場ではあまり聞きなれないものであったかもしれません。しかし、研究であれその他の活動であれ、私たち学生が自分たちの日々の活動に対して誇りを持ち、先生方や同じ学生の方たちと語り合う機会は、これまであまり無かったように感じます。それゆえ、今回のシンポジオンに参加し、まちづくりに対し同じような問題意識、考え方をもちた学生の皆さんと懇親会、さらにはその後の2次会まで尽きることなく語り合うことができたことは、私にとってとても貴重なものとなりました。今回シンポジオンに参加した学生、先生方はみなさん、もちろん私を含め、これからのまちをどのようにしたら良くしていけるか、一生懸命考えています。その姿勢は決してマイナスのものではありません。まちづくりにおいてもこれは同じだと思います。まちを悪くしたいと考えてい

る人はおそらくいません。その考え方は大なれ小なれ、それぞれの思いや考えが一つの歯車となって少しずつ前進できるよう、今回の出会いを大切にしながらこれからも研究・活動を行なっていきたい。今回のシンポジオンに参加し、改めて強く感じました。(by 荻谷智大)

●他大学の学生による自主的な活動について知り、また自分たちの活動を外部へ発信することによって、今後の活動への知見と活力を得ることができました。活動を長く続けていく中で、意欲を保つためには外部との関わりが非常に重要だと私は考えています。外部に認められることは誰にとっても単純に嬉しいことであり、自分たちの活動に誇りを持つようになるからです。(by 後藤洋平)

5. 専門家からのコメント

●こじんまりとしてはいましたが、内容の濃い集まりだったと思いました。何がよかったのか。たぶん、その地域に密着し、そこにあるものを素直に受け入れ、いわゆる専門家の案を押し付けなかった、という事なのだと思います。問題の解決を図る時、どうしても「上から目線」というか専門家の「独断専行」的な押し付けが起こり勝ちですが、今回それが見られなかったというところに、発表された各案、計画の特徴があるように思いました。(by 佐久間博(アトリエ佐久間))

●専門学校の教育の特徴は、社会に開かれた実践教育を重んじる場所にある。実際の個別なニーズに応える活動から学習するという専門学校ならではの教育方法は、自発的な興味関心から出発する大学の研究活動とは異なるアプローチを持っている。大学と専門学校の交流はこのような面でも有意義であると思う。

(by 増田学身(東北文化学園専門学校))

6. おわりに

(1) まとめ 地域の諸問題について、学生諸君は個性を生かして多種多様な観点で取り組んでいる。こうした問題を横並びでみると、何か連帯感が静かに生まれ、各自お互いの顔をみながら頑張っていこう、といいあっていたかのように思えた。これは何にもかえがたい成果と考える。

(2) 気づき 今回は、二点、新たな発見をさせていただいた。第一点、会場内にたまたま構造系の学生が数人おり、彼らは始めのうちは、計画系の学生がまた何かしているといっているが、発表者自身がプライドをもって楽しく語り合っている光景を見て、構造系もそんなノリで何かしてみたくなった、としみじみ語っていた。これは、若者が諸問題に取り組む姿勢の原点そのもののようにも思えた。

第二点、参加された学生諸君の感想は「ためになった」というものではなく、「おもしろかった」という熱いものであった。語り合いがなせる業である。この世の中、すぐに「役に立つ、ためになる」志向があるが、もっと感動を満喫したいものである。もちろん、建築人(大人)は、彼らのパッションを前に勇気づけられたといっても過言ではない。

最後になりましたが、皆さんには出会いを楽しんでいただけたことが何よりと考えております。

／増田豊文(東北文化学園大)／富樫豊(富山支所役員)／